

---

第 64 回多摩川流域セミナー 開催報告  
源流域の森と水の保全活動について  
～上下流連携で考えよう～



---

## 第 64 回多摩川流域セミナー 開催報告（詳細版）

---

### 目 次

|                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| 1. 開催概要.....                      | 2  |
| 2. セミナー（20 日の部） .....             | 3  |
| 2.1 開会挨拶 .....                    | 3  |
| 2.2 主催地挨拶 .....                   | 3  |
| 2.3 報告：東京水のふるさと『水道水源林』 .....      | 4  |
| 2.4 講演①：山梨県小菅村 多摩川源流の村としての歩み..... | 6  |
| 2.5 講演②：人口 500 人の村の森づくり .....     | 8  |
| 2.6 講演③：上下流連携で取り組む、源流文化の継承.....   | 9  |
| 2.7 ポスター報告.....                   | 12 |
| 2.8 意見交換.....                     | 14 |
| 2.9 閉会挨拶.....                     | 22 |
| 3. エクスカーション（21 日の部） .....         | 23 |
| 3.1 開会 .....                      | 23 |
| 3.2 川池地区.....                     | 23 |
| 3.3 橋立地区.....                     | 25 |
| 3.4 雄滝 .....                      | 27 |

---

## 第64回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025年12月20日(土)～12月21日(日)

20日の部：セミナー(小菅村中央公民館、WEB配信)

21日の部：エクサカーション(小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20日の部：19名(会場6名、WEB13名)、21日の部：13名

主催：多摩川流域懇談会

### 1. 開催概要

テーマ：源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

日程：2025年12月20日(土)～12月21日(日)

20日の部：13:00～16:35

21日の部：9:00～12:30

形式：20日の部：セミナー(小菅村中央公民館/オンライン開催(ZOOM))

21日の部：エクサカーション(小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

主催：多摩川流域懇談会

セミナー登壇者：

主催地挨拶：舩木 直美氏(小菅村村長)

報告：千葉 徹也氏(東京都水道局水源管理事務所技術課水道水源林保全管理専門課長)

講演①：木下 拓郎氏(小菅村源流振興課課長)

講演②：中村 裕樹氏(丹波山村振興課副主査)

講演③：青山 大我氏(NPO法人多摩源流こすげ)

ポスター報告①：中野 百々花氏、柏倉 康平氏(法政大学人間環境学部人間環境学科)

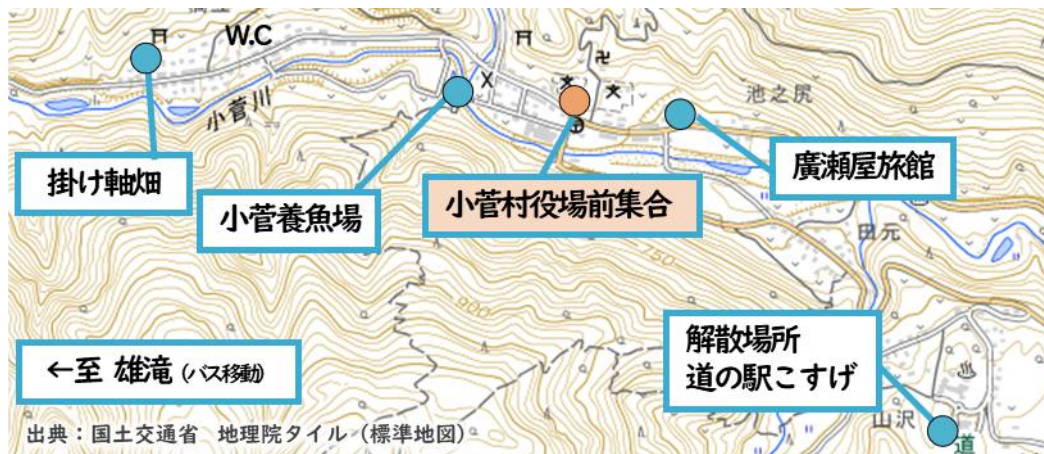
ポスター報告②：吉田 祐記氏(エコロジカル・デモクラシー財団)

コーディネーター：神谷 博氏(多摩川流域懇談会 運営委員長)

コメンテーター：小堀 洋美氏(東京都市大学客員教授・名誉教授)

参加者：20日の部：19名(会場参加6名、Web参加13名)、21日の部：13名

エクサカーション【ルートマップ】



## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

## 2. セミナー (20 日の部)

### 2.1 開会挨拶

多摩川流域懇談会運営委員長の神谷氏より、開会の挨拶およびセミナー主催の「多摩川流域懇談会」と小菅村との関わりについての説明があり、第 64 回多摩川流域セミナーが開会されました。

<主な内容>

- ・ 平成 20 年の第 28 回セミナーぶりに源流の小菅村でセミナーを開催することとなった。
- ・ 2 年前から源流におけるセミナーの準備を始めていて、小菅村や丹波山村と事前調整していたが、実際にセミナーを開けるようになったのは今年になった。
- ・ 多摩川流域セミナーは毎年 2、3 回行っており、開催地域のバランスも含めてテーマも幅広く取り組んできた。近年は源流の問題を避けては通れない状況が出てきたということで、今回は源流の問題や下流への影響・連携等について議論できればと思う。



### 2.2 主催地挨拶

小菅村村長の舩木直美氏より、主催地挨拶をしていただきました。

<主な内容>

- ・ 小菅村は豊かな森に囲まれた清らかな水を源として、下流の地域や多くの人たちの暮らしを支えている。
- ・ しかし、近年は気候変動や森林の荒廃によって、水資源の自然環境を取り巻く状況はととも変化していると思う。
- ・ このような中で村民は、源流の森を守り、水の恵みを次の世代に引き継ぐ大きな役割を担っていると感じている。本日は小さな一歩ではあるが、自然と向き合い、水と森の大切さを改めて考える機会になればと思っている。



## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクサカーション (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

### 2.3 報告：東京水のふるさと『水道水源林』

東京都水道局水源管理事務所技術課の水道水源林保全管理専門課長の千葉徹也氏より、東京都水道水源林の取組みについて報告をしていただきました。

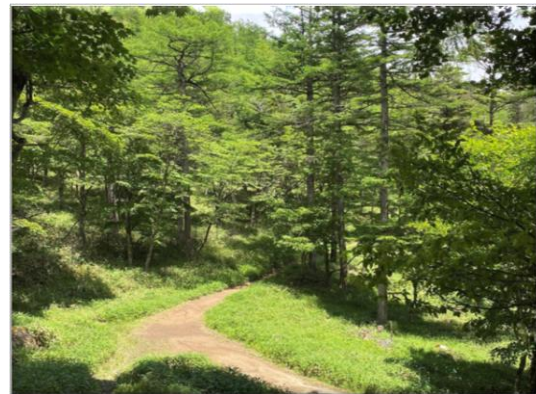
<主な内容>

#### 2.3.1 はじめに

- ・ 東京都の水源は約 2 割が多摩川、約 8 割が利根川となっており、片方の川で事故があっても水を結合できる連結管があるため、非常時でも水を賄うことができる。
- ・ 水道水源林の面積は約 26,000 ha であり、東京都の約 10 分の 1 の面積である。
- ・ 1900 年代初頭、山梨県甲州市の方では荒れた山がみられ、雨が降るとすぐに川の水量が多くなってしまい、逆に雨が降らなければ渇水してしまうことが多かった。そこで 1901 年に山梨県側の森林を譲り受け、直接東京都が森林管理を実施していくこととなった。
- ・ 大正期には年間 150 万本以上の植栽を行った。とても労力と時間がかかる作業だった。それから約 100 年が経った現在では、緑豊かな森となっている。
- ・ 水道水源林の機能としては、水源涵養機能、土砂流出防止機能が挙げられる。その他にも水質浄化機能や、レクリエーション機能等も期待できる。



1900 年頃の山梨県甲州市笠取山付近



現在の山梨県甲州市笠取山付近

#### 2.3.2 東京都水道水源林の管理方法

- ・ 水道水源林には天然林と人工林があり、天然林は自然の推移に委ねることを方針にしており、ヘリコプターで上空からモニタリングしている。人工林では主に間伐と枝打ちを行っており、これを繰り返すことで林床に光が入り、下層植生が成立する。人工林といっても木材を生産する生産林ではないが、綺麗な森を育てる意味で管理をしている。
- ・ シカ被害対策や山地災害の復旧等も行っている。

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカーション (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

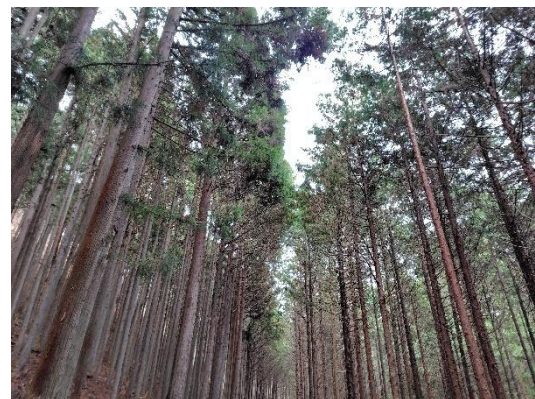
- ・ 購入民有林の整備も行っている。東京都水道水源林のうち、約半分は民有林である。森を手放す意向のある方々から買い取らせてもらっている。

### 2.3.3 上下流連携の取り組み

- ・ 多摩川水系と利根川水系において、河川の上下流における交流や、水源の理解を促すために、水系の親子対象の上下流交流会を行っている。交流会では丹波山村や水と緑のふれあい館に行ったり、地元の木材を使用した教室等も開いている。
- ・ 「みんなでつくる水源の森実施計画」の目的は、「①多様な主体と連携した森づくり」と、「②都民の理解を促進する取組」の 2 つに分かれる。
- ・ ①では、都民の皆様と連携し、「多摩川水源森林隊」というボランティアを行っている。登録者数は 1,000 名以上で、毎週木曜日と土日に間伐作業や枝打ちを行っている。また、水源林ツアーも行っている。コロナ禍では、いつでもどこでも水源地の様子を楽しめるように動画配信を始め、約 40 本の動画を公開している。さらに企業と提携し、水道水源林の一部にネーミングライツを設定し、森づくりの活動を行っている。実際に森づくりを行うのが難しい企業向けに企業協賛金も募集しており、いただいた協賛金は水源林の保全育成に活用している。
- ・ ②では、令和 4 年に水道水源林に関する情報や魅力を発信するためのポータルサイト「みずふる」の公開を行った。また、水道水源林内には、多くの方々に水源林を訪れていただき、森林の働きと環境保全の大切さを理解いただくため、「水源地ふれあいのみち」と名付けた散策路を 3 つのゾーンを設定し、整備している。



水源林ツアーの様子



枝打ちで整備した森の様子

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

### 2.4 講演①：山梨県小菅村 多摩川源流の村としての歩み

小菅村源流振興課課長の木下拓郎氏より、山梨県小菅村の取組について講演いただきました。

<主な内容>

#### 2.4.1 はじめに

- ・小菅村は山梨県の最東端に位置し、村全体の 95%以上が森林であり、古くから東京都の水源林として重要な地域であった。
- ・源流域は水質だけでなく、水量や河川の安定性にも直接影響を与えるため、その管理と保全は村の暮らしと一体となって進められてきた。
- ・下流域との連携の促進をうながすために、源流にこだわった村づくりを行っている。
- ・源流まつりは、昭和 62 年から 38 年間開催しており、来場者を村民総出でおもてなしをする。コロナ禍を経た現在は、村民自身も楽しめる祭りへと改革が進行されており、高齢化や担い手不足による村の負担の問題を踏まえ、各種団体・企業・学生の皆様に手伝っていただき、新たな取り組みを検討している。
- ・上下流連携を図るため、狛江市と友好都市協定を締結しており、狛江いかだレースの参加や狛江市民祭りでの出展等、継続的な交流を行っている。
- ・2005 年には全国源流の郷協議会を設立し、全国に源流域の保全の重要性を発信している。源流サミットを全国各地で毎年開催しており、今年度は 2 月に東京での開催を予定している。



多摩源流まつりの様子



狛江いかだレースの様子

#### 2.4.2 小菅村の森林の歴史

- ・多摩川は江戸時代より主要な生活用水を供給する重要な流域であり、上流域の森林の状態が下流の水質や水量に影響を及ぼすことが広く認識されていた。そのため、源流域では村ごとの規範に基づき、無秩序な伐採を防ぎながら管理されていた。
- ・戦後の拡大造林政策では、小菅村でも広範囲で人工林の造成が進められた。当時は「長木 1 本で日当になった」というほど木の価値が高かった。

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

- ・ しかし、海外材の輸入や生産性の劣化により、手入れが追い付かない森林が多くなった。間伐が進まないことで日光が入らず植生が育たない森になり、保水力の低下や豪雨時の土砂流出リスクの高まりが課題である。
- ・ 平成に入ると森林の公益的機能への認識が高まり、小菅村でも間伐や路網整備等、民有林の再整備の取組が本格化された。ただ路網整備は難しく、限られた財源ということに加え、小菅村特融の急峻な地形条件もあり、整備が十分でない。シカの被害も深刻で、幼木が食べられて森林再生が進まない地域もある。
- ・ さらに大きな課題が人口減少であり、1955 年から 2025 年にかけて人口が約 72.5 %減少した。現在は 65 歳以上の高齢者が約 45%を占めている。特に若年層の流出が続いており、森林管理の担い手も減少している。
- ・ 適正な間伐や森林整備には年間数千万円規模の予算が必要とされるが、令和 6 年に小菅村へ譲与された額は約 1,000 万円程度にとどまり、実際の森林管理ニーズを満たすには財源が十分でない。

### 2.4.3 連携の取組について

- ・ 外部企業との取組として、小菅村・大成建設株式会社・NPO 多摩源流こすげの三者協定を結び、林産材活用や水源林の再生、鹿食害に対する環境教育等、自然資源を生かしたグリーンインフラの構築「Kosuge-Model」に取り組んでいる。
- ・ 日本たばこ産業株式会社とは、企業の森「JT の森 小菅」において混交林化・広葉樹植栽による水源林再生の取組を行っている。
- ・ サントリー株式会社とは「天然水の森 多摩源流小菅」にて、長期協定による水源涵養と持続可能な森林管理の推進を目的として連携し、活動している。
- ・ 下流域の皆様にも「水源を支える当事者」として関わってもらうことが不可欠で、流域全体で責任を共有するという考え方にに基づき、今後どのように話し合い、取り組んでいくのが課題となる。

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー（小菅村中央公民館、WEB 配信）

21 日の部：エクスカージョン（小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝）

参加者：20 日の部：19 名（会場 6 名、WEB13 名）、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

### 2.5 講演②：人口 500 人の村の森づくり

丹波山村振興課副主査の中村祐樹氏より、山梨県丹波山村の取組について講演いただきました。

<主な内容>

#### 2.5.1 はじめに

- ・ 丹波山村では約 97%が森林であり、小菅村と同様に険しい谷間に集落がある。人口は昨日時点で約 490 人になり、高齢化が進んでいる。
- ・ 丹波山村ではかつて金山があり、炭焼き等も行われていた。
- ・ 丹波山村の森林の約 75%が東京都有林で、古くから水源の森でありつつも、村の生活のために使われていた森でもあり、比較的広葉樹林帯も多い。



丹波山村の風景



丹波山村の森の景観

#### 2.5.2 企業との連携について

- ・ 急傾斜地と東京都有林によって木材生産に適した場所が少ないため、企業と協働して森づくりを進めている。
- ・ サミット株式会社と東急ホテルズ&リゾート株式会社との提携では、ツアーとして森林整備や耕作放棄地対策等の取り組みを行っている。サミット株式会社のポイント会員向けに植樹ツアー等を開催したり、耕作放棄地では農業体験や収穫ツアー等を行っており、都心在住の方にも来ていただいている。

#### 2.5.3 「水源地」としての「プライド醸成」

- ・ 「やまなし水源地ブランド推進協議会」に参加して、官民連携プロジェクトを行っている。この協議会に参加したことで水源地としてのプライド醸成ができた。
- ・ 「木のまちサミット」への参加や、木材、林地残材の活用推進強化を行っている。

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー（小菅村中央公民館、WEB 配信）

21 日の部：エクササイズ（小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝）

参加者：20 日の部：19 名（会場 6 名、WEB13 名）、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

- ・ 村内外の人との交流拠点としての意味合いも込めて丹波山村役場の新庁舎を建設し、庁舎内に木のおもちゃを置かせてもらっており、子どもたちが大事に遊んでいる。
- ・ 村の移住促進事業でも林業をピックアップしたり、イベント出展で「水源地」の PR をすることで、「住みたい田舎ベストランキング」において No.1 になった。林業事業者の雇用も増加している。
- ・ 村内でも「水源地」として「守るべきもの」という古くからのシビックプライドが醸成され、水源地活動への理解が向上している。
- ・ 今後の課題・展望として、山梨県の村が他都県の「水源地」であることの PR をしたい。



丹波山村マスコットキャラクター  
「タバスキー」の木材グッズ



丹波山村役場の木のおもちゃ

### 2.6 講演③：上下流連携で取り組む、源流文化の継承

NPO 法人多摩源流こすげの青山大我氏より、小菅村における上下流連携、源流文化の継承等についての取り組みについて、講演いただきました。

<主な内容>

#### 2.6.1 NPO 法人多摩源流こすげの取り組み

- ・ NPO 法人多摩源流こすげの取り組みは「体験」、「多摩川源流大学における人材育成」、「多摩川源流研究所における研究」、「その他」の 4 つに分かれる。
- ・ 多摩川源流大学における人材育成では、大学と連携した授業の開催や企業研修を受け入れている。
- ・ 大学連携では大学の授業として小菅村に来てもらい、体験を通して、源流域の伝統的な知恵や技を経験し、価値観や生活の多様性を感じてもらっている。年間約 1,500 人の学生が週末に小菅村を訪れ、季節ごとの農作業を体験している。
- ・ 多摩川源流体験は 2001 年より多摩川源流研究所の事業として開始し、現在は NPO 法人多摩源流こすげで実施している。参加団体として水辺の楽校や大学、企業等に参加してもらっている。



## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクサカーション (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

- ・ 近年は流域の実施団体の体制も変化し、市民団体等の受け入れは減少傾向であるため、森林団体や下流域の団体の新しい世代の皆様との機会を復興させることが重要だと思う。
- ・ 冬の源流散策ツアーも予定しており、村の見学やヤマメ捌き体験も実施する。



多摩川源流体験の様子

### 2.6.2 大成建設株式会社との森林づくり

- ・ 2024 年より大成建設株式会社と連携し、源流域を拠点としたグリーンインフラ推進構想「Kosuge-Model」創出に関する協定を結んだ。
- ・ 小菅村で伐採・製剤した木材を大成建設株式会社で利用した後、人工林エリアでは広葉樹を植えて自然林化を目指している。
- ・ 広葉樹植林エリアや気象植生エリアでの保全活動として防鹿策を設置し、シカによる食害防止対策を実施している。
- ・ 都市部にいる大成建設株式会社の社員に、実際に小菅村の現場に触れることで会社と小菅村で行っている事業を知ることができる企業研修を年 6、7 回行っており、年間 100 人以上の社員が訪れる。1 泊 2 日で小菅村に来てもらい、地域の課題に応じて多摩川源流体験の企業研修版を行っている。
- ・ 大成建設株式会社本社の新コモンスペース「ROCKai」の改修工事にて、小菅村の山林から搬出された木材が食堂のカウンターとして利用された。食堂では小菅村の特産品ジビエ肉や漬物などを用いたカレーが提供された。

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025年12月20日(土)～12月21日(日)

20日の部：セミナー(小菅村中央公民館、WEB配信)

21日の部：エクサカーション(小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20日の部：19名(会場6名、WEB13名)、21日の部：13名

主催：多摩川流域懇談会

### 2.6.3 在来品種の栽培と地域食文化の継承

- ・ 在来品種の栽培と地域食文化の継承の取り組みを行っている。中山間地域では大量生産式の農業は行われておらず、各世帯で必要な分だけを賄うような農業が行われている。
- ・ 小菅村の特産品として在来ジャガイモ「ふじしゅ」がある。小ぶりだが身の引き締まったジャガイモで、「ネギ味噌」と合わせる食べ方や、煮っころがしの料理とともに受け継がれてきた。
- ・ 「ふじしゅ」の品種登録はなく、小菅村全体で農業がどれぐらい行われているのかということとは分かっていない。近年は栽培品種の切り替えや農地規模縮小が続き、小菅村の中で続けて「ふじしゅ」を栽培している人は10人以下だと思われる。
- ・ 多摩川源流大学では「ふじしゅ」の種イモを継承して栽培を行っており、販路確保や商品化による生産の拡大、安定化を図っている。また、東京農業大学遺伝子センターと共同で「ふじしゅ」の遺伝子解析も行っている。
- ・ それぞれの地域に食文化と一体となったそれぞれの在来ジャガイモがあるが、生産者の減少に瀕している。様々な地域における情報共有や、つながりを続けることが重要である。
- ・ 小菅村在来蕎麦は、高齢化とともに家庭や飲食店でみられる機会は少なくなってきた。また、近年の気候変動でソバ栽培がうまくいかないため、種の保存も急ぎたい。
- ・ 多摩川源流大学ではソバも栽培し、冬に蕎麦打ち体験を行い、新蕎麦を食べて、住民・大学生・移住者で交流する機会をつくっている。
- ・ 小菅村の中山間地域では、植物性タンパク質の味噌を作っていたが、高齢者世帯が多くなることで大鍋で煮る等の作業が困難になり、味噌づくりを辞めた家庭も多い。
- ・ 大豆の栽培を続ける村民と多摩川源流大学の共同でつくった大豆を大釜で煮ることで、小菅産味噌を食べたい村民に提供することができている。大学生や村民の体験プログラムとして実施し、村民から味噌づくりを教わり、味噌料理もつくっている。
- ・ 小菅村の無形文化財として獅子舞や神楽、お松焼き等の行事がある。お松焼きはどんと焼きと呼ばれるもので、1/15頃に毎年実施し、残り火で団子を焼いて食べると一年中風邪をひかないといわれる。
- ・ 「源流畑の学校」プログラムでは、源流域の農業と食文化、伝統を住民との交流を通じて体験するプログラムである。月1回程度、日帰りで体験してもらい、体験や移住者・交流人口の農業参画のみならず、生産後継者としての農業実践としても行っている。
- ・ 小菅村の中の農業だけにとどまらず、暮らし方・文化と関係があることで、村の生物多様性や景観にも関係し、これらの地域資源の価値を説明できるようになることが「継承」の第一歩である。そして複層化した地域人材によって体験プログラムを開催することで、下流域の方々にも知ってもらえる仕組みができる。

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクササイズ (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

- ・ 地域に関わる人材は、農業システムの一部として関わるという意味合いで入れ込んでいきたい。また、村の観光・土産になっているものを提供・発信することで、村外での生産量が増加する。村内・村外関わらず、生活の中の一部に組み込んでいきたい。



「ふじしゅ」の収穫



蕎麦打ちの様子

## 2.7 ポスター報告

### 2.7.1 法政大学と多摩川流域の取り組みについて

法政大学人間環境学部人間環境学科の中野百々花氏と柏倉康平氏に法政大学と小菅村の取り組みについて報告いただきました。

<主な内容>

- ・ 法政大学人間環境学部小島ゼミでは、上流から下流まで「流域」で関わる実践として「多摩川流域連携創出 PJ (多摩川 PJ)」というプロジェクトを行っている。
- ・ 上流域と下流域で地域ごとに課題がみられる。例えば、上流域では自然保護が行われており、下流域では政策活動が行われている。単一の地域で課題解決を行うのは難しく、上下流域連携で取り組むのがよいと思っている。「多摩川 PJ」というのは流域視点で持続可能な流域圏の構築と連携を目指している。
- ・ 「多摩川 PJ」は流域単位で人と人、人と自然等をつなぎ、学生としてできることを考えて取り組んでいる。連携の促進についてもお話をさせていただく機会を持つことで、多世代の関係人口創出を目指している。
- ・ 主な活動としては、多摩川源流大学のプログラムの参加や、奥多摩では木育活動で関わらせてもらっている。下流域では干潟観察会や水辺の楽校のお手伝いをさせていただいている。



## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

- ・ 2024 年度には上下流域連携を図るために木育活動を始め、丸子の渡し祭りや SDGs パートナーまつりのイベントに木育のブースを出展した。子ども達に楽しんでもらうことはできたが、興味のない子どもたちにとどのような形の環境教育を行えばいいかという課題があった。
- ・ 小菅村では大学生が村民と一緒に村を回り、小菅村 PR のポスター制作を行った。学生の視点から見れば特別に見える景色が、村民の視点から見れば日常の景色であったり、お互いに違う視点から村への理解と愛着を深めた。学生同士のコミュニティ構築の目的もあったが、結局活動に参加したのは法政大学のみだった。今後は学生同士の構築はもちろん、さらに村や村民と関わることも考えていきたい。
- ・ 小菅村と NPO 法人多摩源流こすげが主体として、法政大学人間環境学部が展開するインターンシップ型の「小菅村キャリアチャレンジ」という科目がある。これは学生が 7 日間小菅村に訪れ、地域おこし協力隊として活動するもので、地域おこし協力隊のこれからを展望するための検証作業も実施している。
- ・ 今後の展望として、多摩川源流大学でのプログラムの継続や、継続的な関係人口として源流に関わることで次世代に継承を行いたい。また、多摩川上流域をブランド化するため「多摩川 valley」と名付けている。上流域の食文化や自然環境を「多摩川 valley」を通じてブランディングしていきたい。



木育活動の様子



小菅村キャリアチャレンジの様子

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日（土）～12 月 21 日（日）

20 日の部：セミナー（小菅村中央公民館、WEB 配信）

21 日の部：エクサカーション（小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝）

参加者：20 日の部：19 名（会場 6 名、WEB13 名）、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

### 2.7.2 多摩川感謝すプロジェクトについて

エコロジカル・デモクラシー財団の吉田祐記氏より「多摩川感謝すプロジェクト」等の活動について報告いただきました。

<主な内容>

- ・ 流域を単位とした交流やネットワークを拡充させるために活動をしている。
- ・ 多摩川は 138 km ととても長く、今日は私の住む川崎市・下流域から小菅村・源流域に来るのに電車で約 3 時間かかった。以前、登山と自転車、カヌーの人力で笠取山の水干から下流まで下ったときは 3 日間ぐらいかかった。それぐらい多摩川は捉えきれないぐらい広大で、偉大な流域だと思う。
- ・ 多摩川流域では、一人一人が素晴らしい活動を長く続けてきたと思う。もし、多摩川がお話しできるとしたら、活動していただいている皆さんにとっても感謝を伝えていると思った。
- ・ そこで、多摩川を大切に下さっている方々と一緒に感謝状を贈るプロジェクトを進めてきた。各地の水辺の楽校等のグループをはじめ、京浜河川事務所やこの多摩川流域懇談会とも連携して、連名で「多摩川からの感謝状」を様々な活動団体にお贈りしている。
- ・ 自分たちの活動が川とどう関わっているのか気づいていないグループも多くあるため、そのような方々も含めて感謝状を渡していき、自分たちの足元の活動が多摩川と関係していることに気づいてもらいたい。それが、流域単位のアクションに繋がればよいと思っている。



### 2.8 意見交換

- (1) 企業・外部パートナーとの取組が大変興味深かった。JT との再生プロジェクトで混交林化とあったが、もう少し詳しく知りたい（効果や狙い等）。天然林と人工林を区別して管理する東京都と対照的な印象があったので質問です。



#### ○木下氏

- ・ 小菅村の鶴峠では針葉樹が主な植生であり、針葉樹の森林の場合、保水力が広葉樹よりも見込めないと思う。広葉樹の森林の場合、葉が落ちたら腐葉土になり、それが水を保水して少しずつ流域に流していくと思う。針葉樹は広葉樹よりも保水機能が見込めないため、混交林にすることによって、保水機能も保持しながら針葉樹も育つことができる森を目指している。

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

- (2) 水道水源林の植樹は現在、広葉樹と針葉樹の割合がどうなっており、今後はどのような割合になるのか。小菅村、丹波山村、両方それぞれ教えてほしい。
- (3) 東京都の水道局、千葉課長のお話をお聞きした中で、水源林が天然林 70%、人工林 30% ということだが、人工林を伐採した後は新しく植林するのか、そのままにしておいて天然林にしていくのか、どちらになるのか。

### ○千葉氏

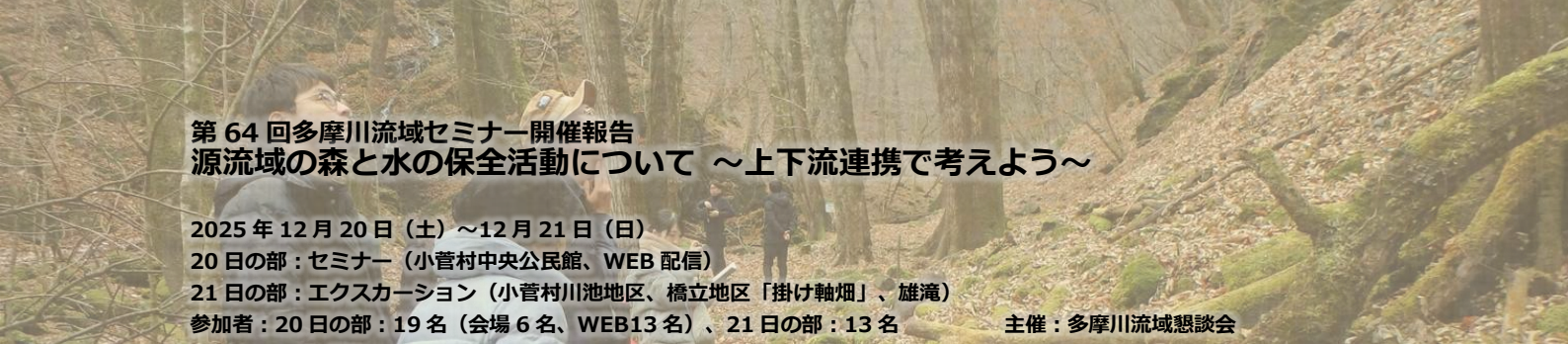
- ・ 令和 7 年 4 月 1 日現在では、小菅村は天然林が約 7 割、人工林が約 3 割である。丹波山村は、天然林が約 8 割、人工林が約 2 割である。
- ・ 人工林を伐採 (主伐) した後は、植栽を行う。

### ○小菅村地域林政アドバイザー：大野航輔氏

- ・ 基本的に東京都有林はあまり皆伐しない方針で管理しているイメージがあるが、小面積の皆伐であれば丹波山村等で実行している事例がある。
- ・ もう一つの伐採方法として間伐があり、成長の悪い木を切って林の中に日光を取り入れていく方法である。
- ・ 東京都は間伐と皆伐の伐採方法を適宜混ぜながら管理しており、割合としては間伐をしている面積の方が圧倒的に多い。間伐をした後は植林をせず、土壤に光を当てることによって下層植生を繁茂させていく方針で行っている。
- ・ 広葉樹林か無花粉のスギを植えていくことが、これからトレンドになってくると思う。
- ・ 東京の場合は産業利用をしないため、間伐材は地面に置いたまま搬出はしない切り捨て間伐という特徴がある。
- ・ 丹波山村、小菅村のどちらにも温泉施設に薪ボイラーがあるため、できれば産業利用を行っていき、カーボンニュートラルな熱源を拡大したり、地域経済に対してポジティブな再生可能エネルギーを導入していく方向性を拡大していきたいと思うが、なかなか難しい状況である。

### ○NPO 法人多摩源流こすげ：石坂氏

- ・ 混交林を進める話については、多摩川源流自然再生協議会で始まった話だと思う。そこで水源の村で人工林を少しずつでも混交林化し、自然に近い森にしていこうとなった。
- ・ 2008 年 3 月に自然再生協議会の全体計画が策定された。そのときに地域で種を採って苗木を育て (地域性種苗)、森を再生していこうとなった。まさに今、企業の連携の中でそれをやり始めている。



## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

- ・ 当時、自然再生の中でも地域性種苗の話も全然世に出回っていなかったが、小菅村は比較的トップランナーだった。最近ネイチャーポジティブという世界的な潮流が訪れ、今まで検討して行ってきたことが間違いではなかったと腑に落ちた。
- ・ これからの小菅村や源流地域の森は、水源を育みつつ、その森の木材を生かした村づくりがしていければ幸せな村づくりができるのではないかと思う。これが出来上がるのは 20 年後か 30 年後かもしれない。私たちも今、中組みでプロジェクトを進めて苗木を植えているため、20～30 年後また楽しみだなど思っている。

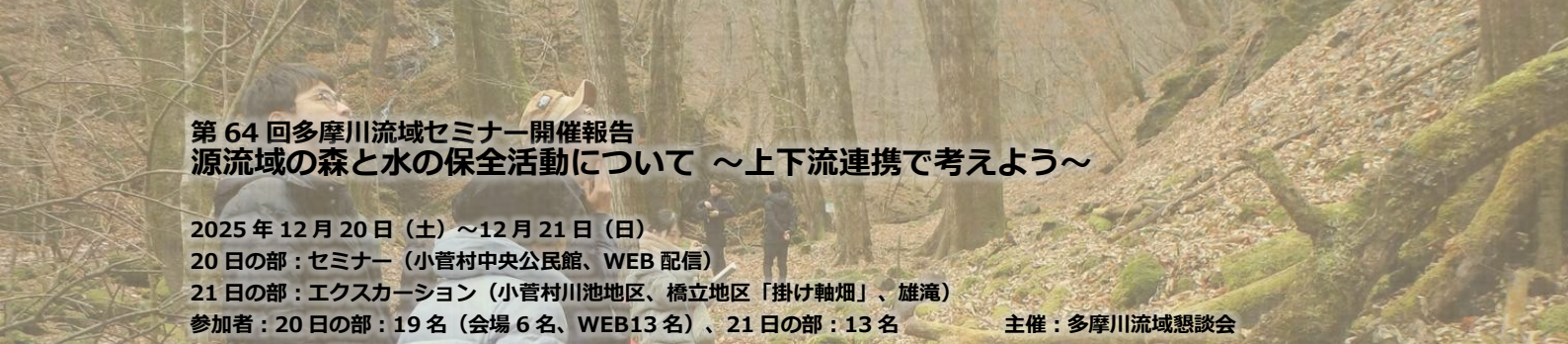
- (4) 森の手入れを行うための民間との協定はどのような経緯、いきさつで取り組むことになるか。
- (5) 企業協働、どのような理由で企業は協力しているのか。企業内のメリットは拡充していくための方策として考えているものはあるか。

○木下氏

- ・ 石坂氏の知り合いが大成建設株式会社に勤めていたといういきさつがある。企業側から呼びかけられたわけではなく、人と人の繋がりによってこのようないきさつになった。

○中村氏

- ・ 丹波山村では企業の森の形としては、サミット株式会社と東急ホテルズ&リゾーツ株式会社と連携している。企業の CSR 活動が叫ばれた時代ということが発端になり、企業側から活動したいということでお声がけをいただいた。
- ・ 日本コカ・コーラ株式会社は多摩川流域に工場があり、ドリンクを作るのに水を使うため、ウォーター・ポジティブなことを森林整備で賄いたいというお話をいただいた。
- ・ Amazon は、データセンターで大きいパソコンを水で冷してサーバー運用する工程で排水が発生する。その排水分以上の水を生産に貢献することで、ウォーターポジティブになるという形でお声がけをいただいた。



第 64 回多摩川流域セミナー開催報告  
源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

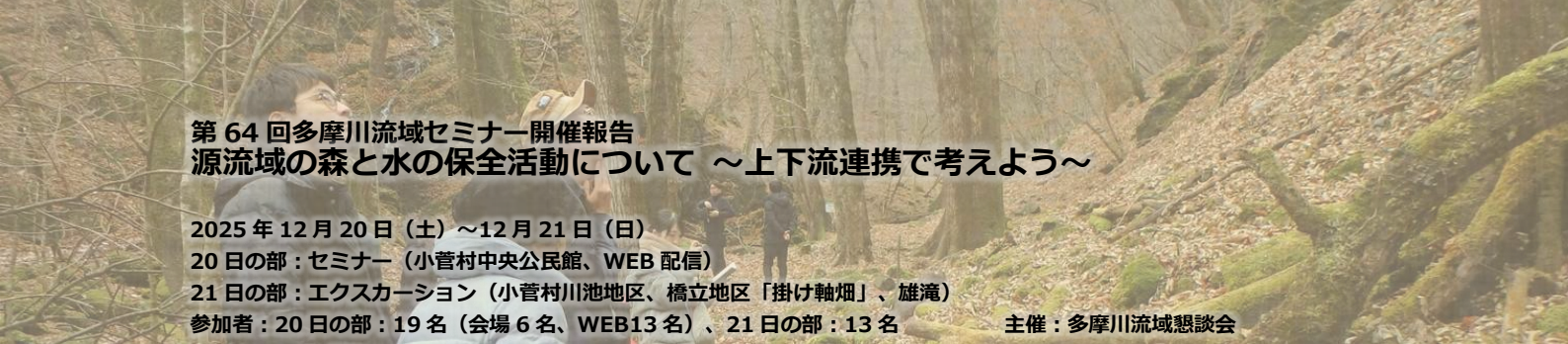
- (6) 丹波山村で「村民の水源地としての意識」という内容がありましたが、村民の村への愛着や誇りを生むために大切だと考えていることはあるか。皆さんにお聞きしたい。
- (7) 源上流域の住民の方々は多摩川を大切にしようという気持ちが育ちやすい環境にあると思うが、下流域の住民の方々の多摩川保全への意識を高めるためにはどうすべきだと思うか。

○中村氏

- ・ 村民の意識向上に大切なことは、まず何よりも川と山の近くで生活をしているということが村民にとって重要なことであると思っていて、それが普段の生活の一つに組み込まれていることだと思う。
- ・ 雨が降らなくなってきたら川の量が少ないと思ったり、雪が降ったら山が白いと感じたり、そのようなことは日常的に村民が感じるころだと思う。特別意識しなくても身近に感じるレベルまで丹波山村の村民は自然に近しいところで生きていると思う。
- ・ 移住してくる方達も、このような村民を見て丹波山村が良いと選んで住んでいるため、改めて「川にごみを捨てないで」等を注意せずとも、それは村民の当然意識であり、村民にとっても下流域にとっても大切な川であるという意識があると思う。

○青山氏

- ・ 私は村外から移住し、多摩川の近くに住んでいるという意味では、私の下流域の実家とあまり距離感が変わらない。小菅村に移住してきてからは、水と切り離して暮らすことができないということが印象的だった。
- ・ 村民自身の上水道も村民自身で管理し、簡易水道という形で毎年 4 月に村長と地区の水道を整備しに山へ入る。そういうところで自分たちで自分たちの飲み水も管理し、当然食べるものも自分たちで作る。
- ・ 都会に出ればお金を通じてやり取りをする。水道サービスも税金を払って行っている。ただ、小菅村では自分たちで体を動かして行っている。都市部の方達の周りにも必ず他の人の行動の成果で、様々な形で関わることでできているんだと思う。野菜を作っている人がいるからスーパーで買えるということ、水道を管理してくれている公共機関の方がいるからできることは、小菅村に来ればそんなに難しくないことが感覚で分かる。
- ・ 仕事ではなかなか直接繋がらないことがあっても、小菅村で感じとったこと、知ったことを一人一人が自分たちの生活の中で反映させられると思う。下流域の川崎市に行けば 150 万人住んでいて、小菅村には 600 人しかいないと思うと、その一人一人の行動を変えなければ大きな成果にはならないと思う。一人一人に伝われば、もう少し源流域のことだけではなく、流域全体に対して、自分たちの身の回りからアクションができるのではないかと思う。



第 64 回多摩川流域セミナー開催報告  
源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

## (8) コメント

○小堀氏

- ・ 多摩川は山梨県の源流から河口までの流路は約 138km あるが、源流域が多摩川流域全体にすむ人々を支えている役割は大変大きいと思う。森に降った雨を涵養し、そこから出る水を東京都の水道水源として利用し、また森林の持つ防災などの多様な機能を担っている。
- ・ 小菅村の地形は非常に急峻で約 95%が森林であり、谷間のわずかな平地に集落ある。農業は、急峻な傾斜地で営なまれ、さらに高い場所に森林があるという特異な地形を上手に生かした暮らしを今でも営んでおり、それが農業の在り方や地域の文化を継承する力になっていると思った。
- ・ 「掛け軸畑」は集落のすぐ近くにあり、傾斜が 30 度等非常に急峻で、水平面には全く道がなく、急斜面をひたすら耕す。これは並み大抵のことではない。そこへ様々な作物を植えている。なぜ土砂が農地に流れないかという、半自然の草原をつくっているためであり、カヤヤススキを刈り取って畑にすき込むことによって土砂が流れない。小菅村だからこそその農業の知恵、暮らしの在り方だと思う。かつては草原を緑肥に使ったり、あるいは屋根に使ったり、様々なことに使われていた。そういうもの全体が、他にはない素晴らしいところで、皆さんが誇りに思える多くの恵みがあると思った。

## (9) 感謝状を贈る団体はどのように決めたのか。

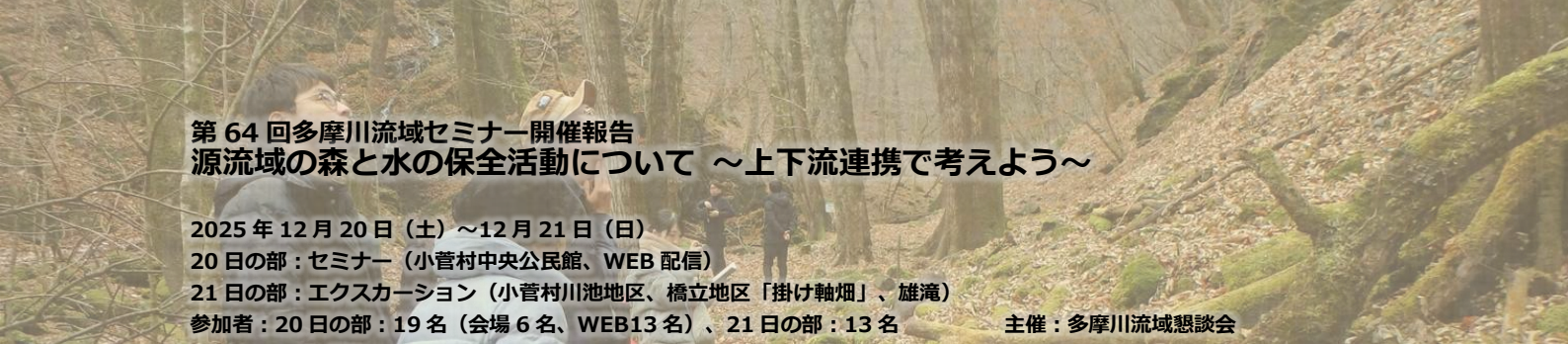
○吉田氏

- ・ 川の近くで活動されている方が多く、そのような方達からの御紹介も多い。私たちは、感謝すネットワークで月 1 回ミーティングをオンラインで行っており、感謝状を渡す団体について話し合い、皆さんで情報を共有して感謝状を渡している。
- ・ 流域の絵巻にハートのシールがマスキングテープで貼ってあり、そこに感謝状をお渡ししている。上流域や源流域ではあまり感謝状が渡されていないため、ぜひ今日のことをきっかけにして、様々な活動に対して感謝状をお送りしたいと思っている。

## (10) 多摩川で活動する団体はどれぐらいいるのか。それをつなぐ取組は何かあるのか。

○京浜河川事務所・柳田氏

- ・ 多摩川で活動している団体は数え切れないほどいると思う。河川管理者として例で挙げれば、河川協力団体がある。多摩川はじめ京浜河川事務所の管轄でいえば 9 団体ある。
- ・ 皆様と連携する部分としては、今後、意見交換会をさらに実施し、多摩川も含めて京浜河川事務所の管轄である鶴見川や相模川の方でも活動している団体と意見交換会を進めていき、皆様がどのような課題を現地で持たれているか把握していきたい。



第 64 回多摩川流域セミナー開催報告  
源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

- ・ 下流・中流・上流で課題が全然違い、活動されている内容によって全然違うところがあるため、そのような課題を河川管理者として情報を吸い上げ、より多くの方に現状を知ってもらい、興味を持ってもらうところが広報として大事だと思っている。

(11) 様々な取組が目的を持って実施されていることは分かったが、法人やこれからの取組を継続していくための工夫があれば教えてほしい。

○青山氏

- ・ 事業や講座等でただの参加者となっていく人が出てくると、ずっとお客さん、または受け入れる人という形になっていく。イベントはそのような体制になりがちである。小菅村としては、とにかく人がいなければ当然無くなってしまいうことが多々あるため、そこに関わる人材に入っていくためのところを増やしていかないと、いつまでたっても村が受け入れる側で、お客さんが増えていくという関係性になる。それもただ村がきついただけなので、昔の村外か村内かという関係性よりも、村外か村内の間は沢山あるので、そのような中に様々な人が関わっていくことで人材が増えていければと思う。そのようなことができれば活動自体も幅が広がり、活動単体で行っていることも継続されていくというフェーズに近づいていくと思っている。

(12) コメント

○鈴木真智子氏

- ・ 昔、水源の森の見学に三笠宮寛仁様がおいでになった。そのときに現地を見学しながらおっしゃったのは、東京都民だけではなく、日本にとってもこの水源林というのは大事だから大切にしていこうように今後つなげていきたいと言っていた。
- ・ 三笠宮様も石原都知事もそうだったが、花粉症に悩まされていて、できれば針葉樹ではなく広葉樹の森にしてほしいというお話が出ていた。広葉樹の方が昔からの自然林というイメージが強く、もし人工林を伐採して新たに植林するのであれば広葉樹にしていたきたいという思いがあり、質問させていただいた。

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

### ○神谷氏

- ・人工的に単一樹種を沢山植えれば、景観的にも暗い森になってしまう。
- ・小菅村に来て最初に感激したのは、ワサビ田の美しい景観である。どこの沢も全てワサビ田だったが、台風 19 号で大被害を受けた。ワサビ田再生も少し手伝ったが、そんなものでは全然どうにもならなかった。人手の問題もあり、なかなか昔のようにはならない。
- ・小菅村の民家はまち並みにはなっていないが、良い家屋が沢山あり、表の方から見えなくてもそれがしっかり残っている。最近であれば少し改築して古民家ホテル等に行っている。
- ・丹波山村は一番大事な街道のまち並みが残っている。丹波山村にはぜひそのような源流の誇れるまち並み景観をつくってほしい。村役場のデザインもきちんとそれを考慮しており、古民家再生やお店もやっていて、なかなか頑張っていると思った。

### ○中村氏

- ・令和 5 年 3 月に新しい村役場を竣工した。それも街道のイメージと、街道の周りが宿場町であったという景観を損なわないようなデザインで発注をかけた。実際、その通りのものが建ち、私たちとしても自負がある。
- ・古民家を村の方で頂戴して、古民家カフェとコーキングスペースも含めた開発等もしている。「宿地区」と呼ばれる地域をそのままの形で後世に残しつつ何か新しいことを行っていきたいと思っている。

(13) 水源林のもつ涵養機能はどのように評価しているのか、定量的な評価の方法等はあるのだろうか。

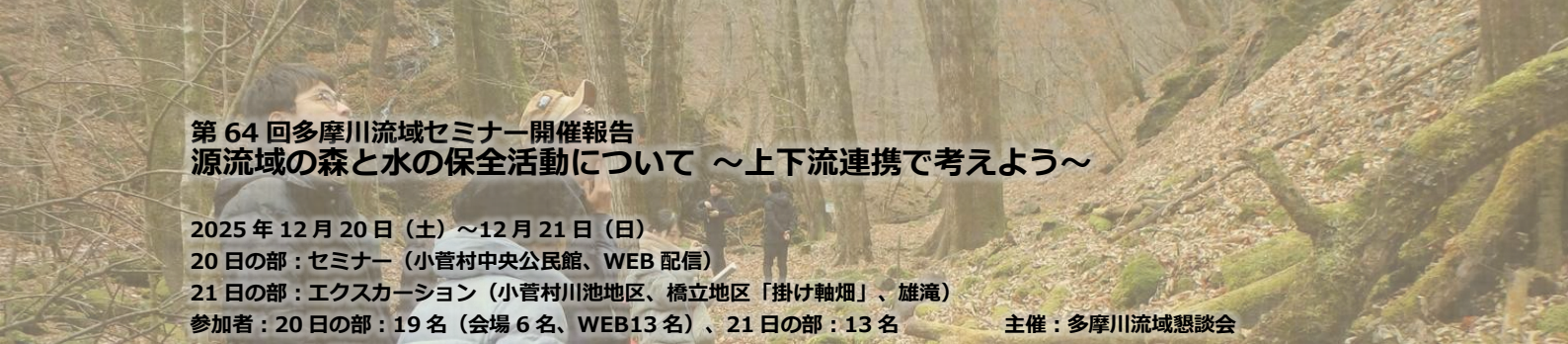
### ○千葉氏

- ・現在、モデルを用いた評価を試みている。

(14) 東京都水源林管理千葉様へ、企業のネーミングライン、協賛は面白い活動だと思った。この取組、企業から資源林管理に声がかかって始まるのか、反対に水源林管理から「この企業に」と声をかけるのか、どのように呼びかけているのか。

### ○千葉氏

- ・ネーミングライツは、公募により募集している。企業協賛金は、企業からの申し込みを随時、受け付けている。



第 64 回多摩川流域セミナー開催報告  
源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

(15) 最後に

○木下氏

- ・ 上下流連携は、村を知ってもらうところから関わってもらうというフェーズへ移行していく。やはり人と人とのつながりは一番重要だと改めて思った。交流することはできても、連携まで行うのはとても難しいものだと思っている。上下流連携の事例等も参考にさせていただきたいため、またこのような場があれば継続させていただきたい。

○中村氏

- ・ 下流の皆さんに村を知ってもらうことが少しずつでき始めていると思う。木下課長がおっしゃる通り、そこから上下流連携にどうつなげるかが大きなポイントだと思うため、そのようなところをどんどん勉強して今後実行していきたいと思う。

○青山氏

- ・ 村長をはじめとして村の皆さんと一緒に、こういう形で下流域の人たちを仲間にしていくという活動が増えている。このような活動を通じて、既に今下流域で関わってくださっている人のようにアンテナを張っている人たちに村からの発信が届けばと思う。そのような人たちをはじめとして、来てもらい、関わってもらうというきっかけがこれからつくりたいと思った。

○小堀氏

- ・ 学生が源流から多摩川流域全体で関わっており、大変素晴らしい活動だと思う。ぜひこの活動を続けてほしい。「多摩川 Valley」の意味も深めてほしいと思う。
- ・ 下流・上流の人たちに源流について知ってもらうことが今後の大きな課題であると思う。
- ・ 地域と企業との優れた事例は、他の企業にとっても参考となると思われた。近年は、企業のネイチャーポジティブ (自然再興) への関心も高まっている。自然を再興することは企業にとって社会貢献になるだけでなく、企業利益を生むとの認識を持ち、企業林を持っている企業をはじめ、源流域の様々な場所と人をつなげる新たなアプローチとなることを期待したい。

○東京都建設局河川部計画課・鈴木氏

- ・ 東京都として貴重な水源であるこの地域の皆様の取組に感謝したいと思う。
- ・ 私たちは多摩川の上流域や多摩川水系の河川計画を担当しており、この流域全体として上流から下流までという取組の中で、我々としてもできることを考えていきたいと改めて思った。

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日 (土) ～12 月 21 日 (日)

20 日の部：セミナー (小菅村中央公民館、WEB 配信)

21 日の部：エクスカージョン (小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20 日の部：19 名 (会場 6 名、WEB13 名)、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

### 2.9 閉会挨拶

京浜河川事務所の佐々木氏、小菅村村長の舩木氏より閉会の挨拶をいただき、第 64 回多摩川流域セミナーを閉会しました。

<主な内容>

○佐々木氏

- ・ 源流にゆかりのない方が源流を訪れて活動をしている意味について考えていたが、それはしっかりとした森林整備が起点で、源流にこだわった村づくりを長い間行い続けることで魅力が生まれ、魅力を感じた方々が訪れるためだと思った。
- ・ 外部の視点からも新しい価値観の意味付けや、農業等の新しい取り組みも聞いて、産官学連携の輪が広がっていることを知った。これからは、産官学連携でそれぞれの役割を果たし、長期間に渡って取り組んでいくことが大事だと思う。
- ・ 河川管理の関係では、流域の治水という概念で治水対策を進めている。徐々にその枠組みは様々な方に認識が広がり始めていて、流域の皆様の一つの共通的な理念になってきているように感じた。改めてそのような意義付けをしながら、河川管理者としても検討して皆様と連携しながら行っていきたいと思った。



○舩木氏

- ・ 人口減少や少子高齢化はとても厳しい状況で、やむを得ないこともあるが、国土を守るためには人が住まないといけないことをこれからも訴えていきたいと思う。
- ・ 私たちは 31 の市町村で源流の郷協議会を開いており、国民の皆様へ源流の大切さを発信している。将来的には、源流基本法という法律をつくり、様々な方に源流へ目を向けてもらい、関わりを持ってほしい。関わりというのは私たちだけではできない部分が多くあるため、意見をいただいたり、一緒に行動をしていただきたい。
- ・ ワサビ田の景観については石積みを行う職人がいない課題がある。実は災害補助金が該当する件なのだが、村に石積みの職人がいないためにワサビ田の景観を守れない。何百という沢があるが、ありとあらゆるところでワサビ田が流れてしまった。獣害等で非常に厳しい状況があり、3 年前から小菅村直営でワサビ田を復活する取り組みを行っている。この伝統を後世に残さなくてはならないと思う。



## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025年12月20日(土)～12月21日(日)

20日の部：セミナー(小菅村中央公民館、WEB配信)

21日の部：エクスカージョン(小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20日の部：19名(会場6名、WEB13名)、21日の部：13名

主催：多摩川流域懇談会

### 3. エクスカージョン(21日の部)

#### 3.1 開会

多摩川流域懇談会運営委員会の神谷氏より開会の挨拶があり、エクスカージョンが開始されました。NPO 法人多摩源流こすげの青山氏に案内いただき、小菅村川池地区から橋立地区「掛け軸畑」、雄滝などを散策し、小菅村の自然環境と村民の生活が密接に関わっていることを学びました。



#### 3.2 川池地区

##### 3.2.1 川池地区について

<主な内容>

- ・昔、小菅村役場の周りは栄えており、人口はピーク時で2,700人だった。裏街道は道路が拡張されずそのままの区画で残っている。かつて裏街道には、映画館やパン屋等があり、現在より賑わいがあった。
- ・小菅村役場には議会場や、小学生が放課後に遊べる場所がある。部屋の装飾や子どもたちが遊ぶ用のおもちゃには小菅村産の木材を使用している。



川池地区の様子



小菅村役場・議会場

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025 年 12 月 20 日（土）～12 月 21 日（日）

20 日の部：セミナー（小菅村中央公民館、WEB 配信）

21 日の部：エクサカーション（小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝）

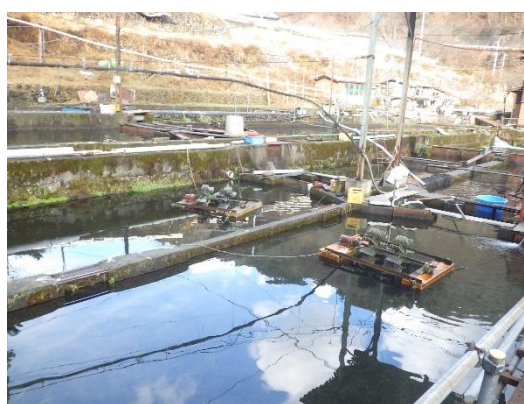
参加者：20 日の部：19 名（会場 6 名、WEB13 名）、21 日の部：13 名

主催：多摩川流域懇談会

### 3.2.2 小菅養魚場

<主な内容>

- ・ 小菅村は、日本の民間で初めてヤマメの完全養殖に成功した。
- ・ 現在もヤマメやイワナ等の養殖が行われており、村の特産品となっている。
- ・ 昔は 6 軒養魚場があったが、家業で行っている方が多く、現在は 3 軒である。
- ・ 多摩川源流のきれいな水を活かし、多摩川の水をかけ流しで使用している。



小菅養魚場

### 3.2.3 ワサビ田

<主な内容>

- ・ ワサビは栽培に 2 年かかるため、表作と裏作で切り替えて毎年収穫ができるようにしている。
- ・ 山を少し切り崩して、石積みで段差を仕切る仕組みは砂防堰堤の役割と似ている。大雨が降った際には導水する箇所を蓋をすることで、ワサビ田の方には水が流れないようにできる。
- ・ ワサビ田は鹿柵で囲わなければ、シカやイノシシ、サルによって一瞬で壊されてしまう。3 年前にこのワサビ田は全滅したが、どうにか回復させた。小菅村には、豪雨により壊滅してから回復していないワサビ田が多くある。
- ・ 付近の倒木で鹿柵が壊れていることがあるため、日々の見回りや管理が重要である。
- ・ 昔はワサビ田の整備と併せて山奥の森の整備も行っていた。日常的に山奥に入ることで、ワサビ田の見回りや補修管理を行うことができていた。

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025年12月20日(土)～12月21日(日)

20日の部：セミナー(小菅村中央公民館、WEB配信)

21日の部：エクスカージョン(小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20日の部：19名(会場6名、WEB13名)、21日の部：13名

主催：多摩川流域懇談会



川池地区のワサビ田

### 3.3 橋立地区

#### 3.3.1 物流会社の参入

<主な内容>

- ・ 橋立地区に物流会社の拠点がある。大月市までの物流はこれからも続くと思われるが、今後は高齢化や人口減少によって物流の末端地域の輸送が困難になることが予想されている。そのような中で、陸送の他に共同配送、ドローン配送、コンビニ事業などを組み合わせて実証実験を行っている。



物流拠点「ドローンデポ®」

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025年12月20日(土)～12月21日(日)

20日の部：セミナー(小菅村中央公民館、WEB配信)

21日の部：エクサカーション(小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20日の部：19名(会場6名、WEB13名)、21日の部：13名

主催：多摩川流域懇談会

### 3.3.2 きおび編み

<主な内容>

- ・ きおび(木帯び)編みとは、鉋で木を薄く削ったものを帯状に編む伝統の工芸品である。間伐材では上手く削れないため、大きく立派な木材が必要である。



鉋で木材を削っている様子



伝統工芸品のきおび

### 3.3.3 「掛け軸畑」

<主な内容>

- ・ 小菅村は山の谷間に位置しているため、午後になると北側の斜面の日当たりが非常に悪くなる。畑がある場所は比較的、日が当たりやすい場所である。
- ・ 「掛け軸畑」は小菅村独自の、世帯ごとに短冊状に区切った畑のことである。ススキ・カヤの萱場の上に、付近の雑木林の落ち葉を持ってきて、畑の肥やしにしている。
- ・ 急傾斜の立地であるため、農業機械は入れず、ほとんど手作業で農業をしている。
- ・ 現在は冬季のため、ムギと地中にコンニャクが植わっている。ムギが育ったら倒して置いておくことで、その下からコンニャクの芽が出てきやすい。これは、ムギが緑被として機能することで、雑草が生えにくく、害虫も寄せにくくなるためである。冬季はムギ畑、夏季はコンニャク畑の二毛作となる。



掛け軸畑から見える小菅村中心街



萱場

## 第 64 回多摩川流域セミナー開催報告 源流域の森と水の保全活動について ～上下流連携で考えよう～

2025年12月20日(土)～12月21日(日)

20日の部：セミナー(小菅村中央公民館、WEB配信)

21日の部：エクサカーション(小菅村川池地区、橋立地区「掛け軸畑」、雄滝)

参加者：20日の部：19名(会場6名、WEB13名)、21日の部：13名

主催：多摩川流域懇談会

### 3.4 雄滝

<主な内容>

- ・雄滝は小菅川の源流、東京都水道水源林内に位置している。東京都水道水源林は東京都に隣接した地区に多く、それ以外は民有林となる。近年は民有林の管理が課題となっており、特に住宅地に近い場所では一般的な皆伐等はできないため、大成建設株式会社が乱切り等をする取組みを行っている。
- ・小菅村の林道では、景観に配慮してガードレールは茶色にしている。
- ・川岸の露頭から湧き水が一滴一滴流れているのが至る所で観察できる。岩に生えているコケを見れば、浸水しやすい場所なのか、もしくは安定している場所なのか、水位の変動が観察できる。
- ・河畔林として立派なシオジの原生林が広がっている。ただ、次の世代として下層に植生が生えてこない。例え芽生えても、冬に凍結した地盤が春に融解して土砂や石が斜面の下に落ちてくるため、なかなか定着することが難しい。土壌もどんどん剥がれ、木の根が土壌表面に流出しているのが観察できる。このような現状を見て、40~50年後のこの森がどのようなになっているのか、自分たちに何ができるかを考える必要がある。



雄滝散策の様子

以上